

若手研究者としての第一歩

—第3回 若手研究者助成を通じた研究—

ここまで2回分のコラムを担当させていただきましたが、今回は最終回となります。テーマは「若手研究者助成を通じた研究」と致しました。コラム執筆のご依頼をいただいたのも、本学会で若手研究者を対象として2019年度より開設されている「40周年記念若手研究者助成」に採択いただいたことがきっかけでした。2019年度の同助成の支援をいただきながら、「ドイツ前期中等教育段階ギムナジウムにおける職業・進学指導の実施基盤の検討—バーデン＝ヴュルテンベルク州のBOGYを事例として—」という主題のもとに研究を進めて参りました。特に助成期間内においては助成金を活用しドイツへの実地調査に出向きましたので、応募までの経緯とともにそうした経験から感じたことをお話させていただこうと思います。

研究助成に応募した当時、私は修士課程に在籍しており、まさに修士論文の執筆にとりかかっていたタイミングでした。ドイツにおけるキャリア教育に関して、とりわけ修士論文の中核的テーマであった地域連携体制という観点からみた特質と課題の解明には、現地での実態の把握が不可欠であると考えておりました。一方で、学部から直接進学した院生という立場でもあったため、金銭的な余裕を十分に持っていたわけではなく、可能であればその支援をいただきたいというのが研究助成の応募への動機となりました。

実地調査においては、文献・資料の収集を行うとともに、ギムナジウム、雇用エージェンシー、商工会議所を対象として聞き取り調査を行いました。調査協力者の方々は大変親切で、見ず知らずの日本人を温かく迎え入れていただいたことへの感謝は尽きません。特に、雇用エージェンシーでは、当初1名の職業カウンセラーへの聞き取り調査をお願いしていたのですが、行ってみれば追加で2名の職業カウンセラーの方々も一緒に準備をさせていただき、想定よりもはるかに充実した調査となりました。

(余談にはなりますが、そんな“変な日本人”に興味を示す方々もいらっしゃいました。ギムナジウムへの調査に伺った際、どこからか私が地元の学校を対象に研究をしているとの情報が伝わったようで職員室の前には地元新聞の記者が待ち構えており、調査開始前に取材を15分ほど受けることとなりました。海外調査の経験が豊富な方々にとっては、至って普通の出来事なのかもしれませんが、翌朝、宿泊先のホテルの朝食会場で自身の記事を読んだことは強く印象に残っています。)

先に述べたように、修士論文の執筆に際しては、実地調査が不可欠であると考えておりましたが、国内外問わず「現地についてみること」の重要性は、指導教員である藤田晃之先生から学部時代より常々ご教示いただいていた点であったといえます。ただし、その教えには、調査を行ってその成果に基づいて論文を仕上げることのみが重要なのではない、という注意事項も添えられていました。先生はよくこれを「においをかぐこと」と表現なさいます。実際に今回の実地調査では、「学校の教室はこういう雰囲気なんだ」というような“本物”の空気感であったり、「こういったかたちで生徒は学習の成果を蓄積していて、実際に手に取れるようになっているんだな」というような文献からは把握することができない情報を、多く得ることができたように思います。

こうした気づきは、論文の中に文章として直接的に現れることは決してありません。しかしながら、論文の執筆の一連の流れの中で、時に問題の所在を明確にし得るヒントとなり、時に「実際の状況を考えれば現実的にはそうはならないだろう」という歯止めにもなることを実感しました。それはやはり現場の「におい」を知らなければ至らない地点なのだと思いますし、これからも大事にしていかなければならない教えであると感じます。

当時はまだ COVID-19 流行以前でしたので、研究計画の中で実地調査というものは現実的な選択肢として考えることができていました。大学院入学以前は海外への渡航経験は皆無であり、正直なところ単独で調査に出向くことへの不安は大きすぎるものでしたが、こうした社会状況に直面して現地で調査を行うことができるありがたさを実感することとなりました。当時、調査を実現させていただいた研究助成に対しての感謝は尽きませんし、海外渡航が可能な状況になりましたら、この経験を今後の研究につなげるべく、実地調査に出向かねばならないと思っております。今すぐには難しいかと思いますが、読者の皆さまにもこうした現場に出向くことの素晴らしさをお伝えできていれば幸いです。

以上で、全 3 回のコラムは終了となります。稚拙な文章で至らない点多々あったかと思いますが、お付き合いいただきましてありがとうございました。私自身も初めてのことで、良い経験をさせていただきました。若手研究者の皆さま、特にこれから研究者を志すことになる後輩の皆さまに、何か少しでも参考になっていることを願っております。

(筑波大学大学院 藤田駿介)